

ほたるのバカ

上演台本

2009 / 11 / 03
作 / 江本純子

《登場人物》

男 女

広大な野原。

男は立って水筒の水を飲んでいる。

女が手をもみ、キョロキョロしながらやってくる。

女「あー恥ずかしい。あたし自然の中で立ちションしたの生まれて

初めて」

男「え、立ってしたの？」

女「うんう。座ってしたけど。誰もいないよね？」

男「わかんない、いてもバツタとかじゃん」

女「バツタなら平気だわ。あーでもちよつと大きい動物になると、
やだな。やだなって言うか恐いな。」

男「鹿とか？」

女「鹿なら平気かな、あ、いや、鹿も恐いな。なんかオシッコして
る時にピョンピョン来られたらなす術ないもんね、太刀打ちで
きないわ」

男、水筒のコップに注いでいた水を飲み干し、

男「あ、飲む？」

女「あ、いいや。大丈夫」

男、水筒の蓋を締める。

女「バンビならいいかな、」

男「何が？」

女「ん？オシッコ見られても平気な動物」

男「バンビと鹿って違うの？」

女「ん？ああたぶんね、バンビの方がもうちよつと可愛い感じじゃ
ん」

女、辺りを見回す。

女「ほんとになんもない原っぱだね、」

男「ちよつとここで休憩する？」

男、敷物（レジャシート）を取り出す。

女「え？」

男「休憩、」

女「え、ここで？」

女、辺りを見回し、怒る。

女「まじで？まじでここで休憩すんの？まじで正気？先進まない
の？」

男「・・・え、何でそんな怒ることあるの？休憩ってフツー喜ばしい
ことでしょ？しかもさ、なんかさつきからだだずつと歩いてる
だけで、すっげーつまんなそうにしてたから、オレは今休憩を
提案したんだけど、ちよつとお茶でも飲む？みたいな。お茶つ
て言うか水だけど、」

女「え、だってなんもないじゃんこ。お茶飲むならさ、お茶つ
ーかしかもただの水でしょ？せめて、もつと何かあるところで

飲むべきじゃない？今ここで、無駄な休憩することなくない？
だいたい、こんなほんつとに何もなくて、水飲むって相
当つまんないと思うよ？今日ってそういうこと、いや、そうい
うほんとにつまらないことするためにわざわざここに来た
の？」

男「違うけど。何かって何、例えば何があればいいわけ？」

女「え？だから、せめて花が咲いてることかさ」

男「贅沢言うなよ、」

女「それこそバンビが走ってるあたりで」

男「バンビなんか走ってるわけじゃないじゃん。なんだよバンビって。
サファリパークじゃあるまいし。」

女「サファリにバンビなんかいないよ。シマウマとかでしょ。あー
あたしシマウマがライオンに食べられるところらすつこい見た
いっ」

男「今？」

女「うん今なんかサファリって聞いたらすつこい見たくなくてきち
やった。シマウマにライオンの群れがぎゃーって襲いかかって、
うおーバリバリってシマシマの肉を引きちぎって、ぎゃー、
痛いー死ぬー、あ、もう死んでるーみたいなおぞましい状態の
とこさ、」

男「じゃサファリパーク行けよ！」

男、超キレる。

女「キレるこたないじゃん。あたしそんなエグいこと言った？」

男「だったらサファリパーク行きやあよかつたじゃん！って話だ
よ！」

女「そう、だね、」

男「お前が焼け野原見たいっつーからテキトーな野原選んでやって
きたんだろーが！」

女「え、だって」

女、再び辺りを見回す。

女「・・・焼けてないじゃん。フツーじゃん。超フツーの野原じゃん」

男「・・・わかつてるよ」

女「すんごい緑が青青してるよね？しかも生い茂ってるよね？あ
たしが隠れてこっそりトイレできちやうくらいにさ。あたしは
さ、焼けた野原が見たいって言ったんだよ？焼けた野原ってど
んな？と思って、」

男「んなのねーよ！・・・ねーんだよ！！」

女「え、ねーよねーんだよ、ってあんたが連れてきたじゃん。ね
ーよじゃねえよ。ねーんだでもねーよ。ねーじゃ・・・さあ・・・
これ何今日のデートのテーマを完全に見失うことになるよね？
何しにきたのウチら？」

男「ピクニックだろ」

女「え、ピクニックなの！まじで！」

男「ピクニックだよ、」

女「え、じゃあピクニックだとしてもだよ。ただのピクニック？超ただのピクニック？目的のないピクニックって超漠然としてるじゃん。何しろって言うの？うろろうろしてりやあいいわけ？こんな何もないところで？野原も焼けてないのに？」

男「ううるさい！ほんと超うっさい黙れバカ！そんなに焼けた野原が見たいなら、焼いたらいいじゃんか！」

男、ライターを放る。

男「てめえで焼けよ！」

男、怒鳴る。

女「あたしが？何あたしが野原を焼くですか？焼いていいんですか？野原って！」

男「焼いていいんじゃないですかー！どうせ誰も見てないし。誰もいねーしーバツタくらいしかさ！」

女「はあ？ああそうですかそうですかじゃあ焼きますよ、焼いたらいいんですよ。バツタもいいんですよね焼いちやって！罪のないバツタも焼かれちゃいますよー！」

男「はい、焼いて下さい、気が済むまで、どうぞ！バツタもどうぞ！食べますから私焼かれたバツタ食べますから成仏しますよーにー！ってね！桜海老みたいなかき揚げ気分だね！桜海老じゃね

え緑海老だよバツタは！」

女「あ、じゃあ焼きますけどねバシバシと。バツタも無視して焼きますけど、ここー帯焼け野原にするって実際結構大変なことだけど、まあそれでも焼こうとは思うけど、はい」

男「はい」

女「まあじゃあ焼くにあたってここ一面があーってガソリン撒くよね？ガソリンって言うか灯油でもいいや。え、灯油とガソリンって同じもの？」

男「知らん」

女「あたしも知らんけどさ、そういうオイル的なもの、すんげーオイルーなものをぶわーって撒くよね？それで火つけるよね？3で、ほら、」

男「なに、」

女「やばいじゃん、あたしらも間違いなく一緒に燃えるよね？」

男「逃げればいいじゃん」

女「逃げれないっしょバアカ！野原一面ばあー！メラメラメラばあーだよ？」

男「穴とか彫ればいいんじゃないん？そんな中にもぐってしのぎやあいいじゃん。野原がプスプスするまで」

女「はあ？モグラじゃないよウチら。え、わかってる？あんたモグラなの？」

男「モグラじゃねーよ」

女「手で掘るの？」

男「あ。オレスコップもってきてるよ。ちっさいやつ。」

男、スコップを出す。

女「なにそれ、超かわいいのもってきてんじゃん」

男「昨日百均にあつたら、買ってみた」

女「今日のために？今日の焼けてない焼け野原を鑑賞するピクニックのために？いつの間にか目的が転じて野原を焼こうって言うピクニックのために？」

男「うるさいごちゃごちゃ言わないで」

女「え、何でスコップよ」

男「だからさー、オレ的には今日はなんか土とか砂とか掘ったりするかなーと思って」

女「え、タイミング的にはバッチリだけど。何焼け野原でままごととかするつもりだったの？」

男「いや焼け野原は置いておいてだよ。なんか自然の下に行くからにはひとつくらいアウトドアっぽいものあった方がいいかなーと思って」

女「わかんないその感覚。アウトドアとおままごとは違うよ？」

男「わかってるよ。ピクニックに行くからにはーと思って。」

女「ピクニックを、おままごとと勘違いしたの？」

男「違う違う違う。ピクニックを、アウトドアだと思ったんだよ？」

女「え、だからそれ完全におままごとグッズじゃん。あたし絶対しないからね、おままごととかね、悪いけど」

男「オレも、しないよ。おままごとは！」

女「ああじゃあもういいや、じゃあ手で掘る件に話戻すけどさ、あたしは何なら、自分の身を守るためなら穴を手で掘ってもいいよ。それくらいガッツがあるつもりなんだわ。だけど、そういうことならあんたはさ、頭で掘ってよ」

男「何そういうことならって」

女「そのスコップをデコんとこにくっつけてさ、こうモグラさんみたいに頭で掘るべきだと思うんだわ、」

男「は？なんで？」

女「モグラみたいに掘ってるとこを観たいからね、私が」

男「モグラは、頭に角なんかついてないよ、たぶん。頭に角がついてるのはなんか架空の動物でしょ？空想の世界の話とかしないでくれる？」

女「だからそのスコップをデコにくっつけて角代わりにして、ぐりぐりやったらいいじゃん。空想が現実になるでしょ？」

男「何言ってるの？」

女「あんたがモグラみたいに超エキサイティングして掘らない限り、あたしに命はないっつーことでしょ？だって火ぶわだよ。」

真剣に掘らないと死ぬから絶対」

男「ああそれは一理あるけども。モグラって・・・」

女「え、だってさあ、あたしが手で掘ってる時に、あんたがそのかわいらしいスコップでよいこらよいこら掘られてたらあたしたまんないよ？超イライラすると思う。そのイライラをさ、モグラギャグで解消してやるって話だよ？」

男「なに、・・・ギャグなの？」

女「まあギャグだね、ある種の、」

男「苛めだと思っただわ、」

女「まあそれでもギャグだね、」

男「あそう、」

女「じゃあ穴掘りに関してはそういうことで。え、で、ガソリンみ

たいなの持ってきてんの？」

男「・・・もってきてないよ」

女「もってないの！」

男「もってくるわけじゃないじゃん」

女「じゃあどうやって燃やすよ！」

男「そういうのは焼く気満々の奴が持ってくるもんじゃない？つー

か、用意すべきじゃない？」

女「お、ちよちよちよちよ、焼くのはあんたでしょ？あたしは単に

焼け野原が見たいつーね、見る側だから。単なる観客だから。

あんた発動、私受動、私見る、それを楽しむ」

男「え、どうしてそうやってさ、いつもいつもデートのとき、いつもそうじゃん！え、どうして？え、なんで何から何まで全部オレがやらなきゃいけないわけ？」

女「別にこれと言った理由はないね、そういうもんだと思ってるから。そういう流れって言うの？だから、与える方受ける方、そういう需要と供給のバランスがとれた、そういうねコンセンサスがとれた？関係ではないんですか？わたくし達は」

男「え、オレスコップもってきたよ？たまたまだけだね。したらさ、

お前がさ、あんたがさ、オイルくらいは用意しとくべきじゃない？オレスコップは荷物にならないから持ってきたんだよ？5

なんか楽しいグッズとして。これで、オイル。オイルって。灯油缶ぶら下げて？ピクニックしろって？あー思いも寄らなかったわ、」

女「缶じゃなくていいよ、あのポリ？みたいなやつあんじゃん。ホームセンターとかで売ってるやつ。」

男「あの赤いやつ？」

女「そうそうそう。フツーはさ、男子なら、ピクニック行く前は1

00均じゃなくてハンズ※とかに行くべきだと思うわ。」

男「は？」

女「東急ハンズだよ」

男「そらわかるけど」

女「でもハンズはき、なんか色々あるだけにごちゃごちゃしてて混乱するからさ、ハンズに行けとは言わないよ。でもせめてあなたのお宅のお近くにあるあなたの町のホームセンターくらいにはさ行って欲しいよね。デパート前に100均って、ださあ」

男「あそういうこと言う？じゃあさ、あんたはあれ？ちゃんと弁当とか持ってきてくれたわけ？」

女「はあ？」

男「おにぎりとかサンドウィッチとか」

女「あんたそんなに炭水化物食べる気なの？」

男「食べねーよ」

女「太るよ、」

男「食べねーから」

女「じゃいらないじゃん。おにぎりもサンドウィッチも」

男「いるよ、どっちかは」

女「あれさ、おにぎりって食べる気する？ほんとに」

男「はあ？」

女「人の手によりぎゅうぎゅう握りつぶされた米を、食べたいのかって話」

男「まあおにぎりってそういうものだから」

女「あたしが日々日常で何触ってんだかわかんないようなそんな微

妙な手で握ったおにぎりなんて食べたいですか？」

男「そういうこと言うなよ、おにぎりって言う、なんかあつたかい
伝統食糧を愛してる人が聞いたらげんなりしちゃうだろ」

女「あたしはね、そういうおにぎり文化が大嫌いなんですよ！」

男「じゃあサンドウィッチでいいよ、いいからさ」

女「あたしパン嫌いなもの知ってるよね？あれなんかフカフカするし。堅いパンもさ、あれ絶対歯が折れんじやないかなって、恐怖なんだわ、」

男「ああそ、じゃあおにぎりもサンドウィッチもない、と」

女「ほんつ、」

男「じゃあまさかおかずなんて」

女「あるわけないよね、」

男「・・・ないか、」

間。

男「・・・なんかさー、やっぱりもう別れよっか、」

女「はあ？」

男「うん、ごめんねいきなり」

女「え、え、何別れ話？」

男「うん、だって、せつかくピクニック来たのに・・・全然楽しくないんだもん」

女「はあ？だってあんたが焼け野原行ってくつて言うのに全然焼け野原

じゃないところに連れてきたのが悪いんですよ」

男「ああ。それは悪かったけど。」

女「はい、で」

男「なんかさ・・まあ今に始まったことじゃないんだけどさ、・・性格悪いんだもん・・ダメだもう」

女「それ今、え、何でこんなぬぼーっと広々としたところで言うのかな」

男「うーん。場所が悪い？」

女「いや、いいけどどこだって」

男「ごめんね。はーっ。だって・・疲れんだよね、あなた」

テンションガタ落ちの男。

男「・・第一、焼け野原なんか、あるわけないし。見れるわけねーし」

女「見れるよ、焼けば」

男「だからー。そういうことじゃないでしょ、」

うつすらと泣いている男。

女「なんで泣くの？あたしが泣きたいよ」

男「だって好きなんだけどさ、・・ああもう。なんで？」

女「・・わっかんない。何が？」

男「なんで好きなのに楽しく一緒にいれないかなーなって」

泣く男。

女「いや、まあ、うん。あー」

男「オレもうわっかんない」

女「はあ・・・」

男「だって、結局いつもこういうことになるよね？」

女「そうだね・・え、あたしが悪いかな」

男「まあ筋は通ってると思うよ、それはあなたたりのね、でもそれは、他人といる時はちよつとはこうフレキシブルにしてくれないと、つていつとも言ってんじゃん！！」

男、超キレる。スコップを地面に叩きつける。

女「ちよつともう・・キレないですよ！」

女も泣きギレる。

男「だって、こういう話何遍もしてるよね？」

女「はいじゃあもう別れるでいいからさ、大きい声あげないですよ」

男「いいじゃん誰もいないし。誰も聞いてねえよ！！」

男、更に大きい声を出す。

女「やだもう！やああ！もうやああ！」

女も泣きわめく。

男「おにぎりくらい作ってくりやよかったんだよ！」

女「作りたくないって言ってるじゃん！」

男「じゃあ買ってくりやよかったじゃん！」

女「そんな金ないよ！」

男「おにぎり買うお金もないの?」

女「ないよ!あたし超貧乏だもん!」

男「嘘だ!いっつも服買ってんじゃん!」

女「親の金だもん!」

男「あっそこめんね!余計なこと言って!」

女「お金もないのにデートなんかしたくないよ!あなたが連れてってくれるって言うから来てんじゃん!焼け野原見せてやるって

言うから『ああ楽しそう』と思って来たんじゃん!」

男「オレはピクニックに来たんだよ!」

女「ピクニックなんか興味ないよ!ピクニックって何するんだよ!」

男「知らないよ!歩いたり風に吹かれて弁当食べたりするのがピクニックっつーもんだろ!」

女「そんなの知らないよ!家でごはん食べてりゃ十分だよ!風に吹かれて砂かぶった弁当なんか汚くて食べれないよ!」

男「そういうのがピクニックの楽しいところだろうがああああ!ああもうお腹空いたああああ!」

女「近くにコンビニなんかないからね!50分以上歩かないとコンビニなんかないからね!」

男「知ってるよ!」

男、持参していた水筒を開け、水を飲む。

男「あー」

女「あ、それあたしにも一口ちょうだい」

男「ない。今で終わりだから」

女「えー。いつの間にそんなに飲んでたの、」

男「だって咽乾き性だから」

女「あたしにもとっておいてくれたっていいじゃんか、」

男「うん。そっちがいつかは飲みたくなるだろうからと思って、一口残しておいたんだけどね、飲んじゃった」

女「えー」

男「ふん、」

女「最悪だね。あたしなんか大きい声出して咽乾いちやっただけど」

女、座り込む。

男「ああ、ちよつとならあるかも」

男、水筒を覗く。

女「ちよつとでもいいからちよつとちょうだいよ、」

男「ちよつと手出して」

女「は?」

男「手、」

女、手を出す。

男「ほら、」

男、女の手上で水筒を振る。

水滴が飛ぶ。

女「え？」

男「それ舐めれば？」

女「え？」

男「ちよっとだけって言ったじゃん」

女「・・・ただの水滴じゃん。」

男「うん」

女「しかもたった二滴だよ？あたし化粧水だって5滴は出すよ？」

男「我慢してよ、もうないんだから」

女「すっごい残念」

女、手についた水滴を舐める。

女「うわ手の味かしない」

男「残念だったね」

女「あたし手舐めただけじゃん」

間。

男「もう帰ろっか、」

女「あ！・・・ああ！」

男「なに？」

女「あのさ、おにぎり食べたいって散々言ってたよね？」

男「言ったけど、何」

女「そんなにおにぎりが食べたいの？」

男「まああればね。」

女「私の作ったおにぎりか？」

男「ああ、そうね」

女「そうですか・・・そんなに好きなの？」

男「はあ？」

女「まあいいや。えっとー、私の作ったおにぎりをあなたは食べた
いつてそういう我がママを叶えてあげる、って言うね、」

男「はあ。え、何、たまには偉いじゃん。え、でもおにぎりはない
んでしょ」

女「お握りはないんですけどー、まあね、はい。私のおにぎりの
味を知りたければこれで、」

男「はあ？」

女、男に手を差し出している。

女「舐める？」

男「はあ？」

女「おにぎりおにぎり」

男「へー。あー。」

男、女の隣に座る。

女、おにぎりを握るマネ。

女「こうね、こうして、はい、これね。素手で握るとべとべとにな

るね」

女、手を広げる。

女「はい。この手に私のお握りの味があるから」

男「ああ、」

女「舐めていいよ。」

男「いいの？」

女「どうぞどうぞ」

男「あ、じゃあ。頂き、ます、」

男、女の手の平をべろりと舐める。

女「どう？・・・どう？」

男「うん、しょっぱい」

女、笑う。

男「うん・・・ありがとう。」

女「どういたしまして」

女、立ち上がる。

男「ごめんね、大きい声あげて」

女「いやそれはいいよ。大きい声出すとすつきりするもんね。そん

なことよかだよ、」

男「何？」

女「あたしさつきさき、その辺の茂みでこっそりトイレしちゃったじ

ゃん。」

男「あ？」

女「あ、オシッコなんだけど。」

男「・・・」

女「それでさ、」

男「あ、もうそこから先言わなくていいから」

女「あ、言わせてもらいたんだけど、でさ、」

男「言わなくていいつつってんじゃん！手洗ってないつつうこと

だろ！」

女「いやまあ、そうだね！」

女、ケラケラと笑う。

男「超ばっちい！」

女「ごめんねー」

男「言ってくれば水筒の水渡したのに！」

女「だって、あんただいが大事そうにして飲んでるから。悪くて」

男「もうバカ！」

女「私のおにぎりオシッコ味」

男「・・・もうファミレス行かない？うがいしたい」

女「あ、来る時に山田うどん※見たよ」

女、歩いていく。

男「じゃそこでいいよー！」

男も歩いていく。

(終)

※劇中に登場する固有名詞について

上演する時代、地域、時世に沿って、適宜変更してください。

○ハンズ、東急ハンズ

「ハンズ」>「ホームセンター」>「百均」

デートの前日、男に行って欲しい行動や場所に対する女独特のプライオリティが見えることがポイントです。

↓例「モンベル」とした場合

アウトドアとして、本気度が増す行動となるので、女のプライオリティはより明確になります。「モンベル」の他、「ノースフェイス」等、アウトドアショップ専門店の固有名詞であれば成立します。顧客の認知度を想定してセレクトすることをお勧めします。

改訂例1 モンベル>ホームセンター>百均

女「でもモンベルはさ、なんか色々ありすぎて、本格的なアウトドアしなきゃってプレッシャーにかられて混乱するだろうからさ、モンベルに行けとまでは言わないよ。でもせめてあなたのお宅の近くにがあるあなたの町のホームセンターくらいにはさ行って欲しいよね。デート前に100均って、ださあ〜」

改訂例2 モンベル>amazon>百均

女「でもモンベルはさ、なんか色々ありすぎて、本格的なアウトドアしなきゃってプレッシャーにかられて混乱するだろうからさ、モンベルに行けとまでは言わないよ。でもせめてさ、〴〵自宅でamazonを見たの？アウトドアグッズに関するamazonのおすすめを何十件もあさって欲しいよね。デート前に100均って、ださあ〜」

○山田うどん

関東エリアを中心に展開するレストランチェーンです。都市部にあるメジャーなファミレスというより、辺鄙な国道沿いでしか見つけないレストランチェーンとして、初演時は選択しました。見つけると「レアで嬉しい」「懐かしくて愛おしい」場所であることがポイントです。

無理に固有名詞を探さないでもよいかもしれません。

デートに失敗した二人が仲直りできそうな・・・あるいはそこでもまた喧嘩するかもしれません・・・とにかく二人のそのあとの時間を想像できるようにな場所を示すことをお勧めします。